

農業朝日賞に輝やく蒜山(ひるぜん)大根

岡山県八束村の大根と燐硝安加里

河 見 泰 成

あまりゾツとしない夜の山中ドライブ

岡山市から旭川の清流に沿って、直線距離にしてタッブリ80km北上すると、ちょうど岡山県を横断したことになり、右手に3つ頭をならべた蒜山(ひるぜん)、左に3つの大きな沢がなだれ込んでいる大山(だいせん)の南壁を見ながら日本海へ下りると、鳥取県の米子市が近い

このあたりは、ちょうど阿蘇を小型にしたような牧歌調のただよう蒜山高原と呼ばれ、スキー場、観光地として知られてもいるが、八束村(やつかむら)を中心として、いわゆる蒜山大根が広く栽培されている。とくに先年、海拔400m~500mのこの高原環境を生かし、合理的かつ前進的な農業経営を行っているという点で、八束村農協が農業朝日賞受賞の榮に輝いてから、蒜山大根の名声はめっきり上昇し、最近では各県からの訪問者が少なくないとのことだ。この大根の生産に、チッソ旭肥料(株)の燐硝安加里が、10数年来「緑の下の力持ち役」を勤めているというのは愉快だ。そこで昨年(昭和45年)の12月14日の朝現地を訪問するため西下した。

八束村の記録によると、昭和41年の50cmが最低で、30~42年の13年間の年間積雪量はほとんど100cm以上、38年のときは260cmの積雪量を記録した豪雪地帯である。

「来られるなら11月中でないとあかん。でないと積雪が消える春まで待たんならんで…。」と云っていた大阪の営業所から「来い」というからには、現地の状況もそう心配することはないのだろう。筆者の気持にこたえるかのように、当日は抜けるように晴れ上がり、暖い日ざしに恵まれたことは幸いだった。

午後5時近く岡山駅前で先着の大阪営業所の吉野、平田さん、そこえ所用のため来岡中だった八束村農協の丸山秋夫さんとともに後藤(敦)さんらも見え、後藤さんが運転する自動車ですり抜け、一路北を目ざして中国山地へと入った。

山にかかるると、かげつたところに残りの雪がチラつく。「やっぱりあるな?。」とっていると、吉野さんが「これから現地まで直行すると、タッブリ4時間はかかる。運転は手馴れた後藤君だけだ、夜道に無理は禁物。とくに山の中ではね…。そして、それにあなたも東京から長時間、さぞお疲れのことだろうから、今夜は途中



大根で埋まった現圃(八束村)

で旅塵を洗い流そうという趣向はいかがですか?。」と声をかけた。まるで筆者の胸中を見すかしたような話である

事実、もうすっかり暗くなって、旭川ダムの水面も見えず、せまい山道を疾走してくる対向車のヘッドライトが見えると、小心者の筆者はその都度、何となく気構えるような感じになる。それに明るいうちに見えていた、あの如何にも脆(もろ)そうな肌をみせながら、のしかかっている懸涯の土を考えると、いい気持ちではない。

こういうやりとりがあって、夜の勝山盆地を抜けて、あと現地にもう一息という湯原(ゆばら)温泉の或る一隅に旅装を解くことができてホッとした。

8年間に、ビックリするほど伸びた蒜山だいこん

さて、われわれが湯原温泉で大休止をとっている間を利用して、最近の大根事情に触れてみよう。

大根は、最近の食生活の変化に必ずしも対応できずに、全般的に需要は低下し、これが次第に生産の停滞をもたらしているようである。去る43年産の全国収穫量は309万5,000トンで、10年前の34年にくらべ1.3倍となっているが、45年度の農業観測によると、44年産は逆に作付面積の減少を反映して、前年より5%減の295万1,000トンとなっている。

大根の生産県としての岡山は、愛知、千葉、新潟、福島、鹿児島諸県のように、必ずしも主産県とは云い難い。しかし、京阪神市場とくに大阪市場への入荷状況についてみると事情はだいふ変ってくる。すなわち次のとおりである。(昭和43年 作物統計から)

「42年の入荷量は、32年に比べ60%近い増加を示して



蒜 山 高 原 に て

おり、出荷産果数も増加している。32年当時は、和歌山が入荷量の約半分を受けもっていたが、42年になると、和歌山の占有率が20%近くにまで下った反面、徳島、岐阜、岡山等からの入荷量が著しく増加している。とくに、32年には6月から10月にかけての入荷量が少なかったが、42年には、この入荷薄の時期を岐阜と岡山でカバーしている。また、1月から4月にかけての早春ものの徳島、および9月から12月にかけての秋冬ものの石川の台頭も著しい。

丸山さんも語っておられたが、京阪神市場を中心に展開される岡山とそのライバルである岐阜、更にその後を追う石川県との間に展開される掛引きは、相当激しいものがあるようだ。

それでは630戸930世帯の八束村の「蒜山大根」はどんなカーブを描いているか、次の数字を見て戴けば判るように、物凄く伸び、これでは農業朝日賞を受賞し、見学者が連日のように見えるのも無理なかならうというものだ。

年次	面積 ha	出荷 (トン)	売上 (千円)	農家支払額 円
38	75	2,607	54,912	35,997
45	322	7,816	370,729	282,298

8年の間に、栽培面積が4.3倍、出荷数量が3倍、売上が6.75倍、農家支払額が7.8倍に膨れあがっている。しかもこれは、農協の手を経たものだけで、このほかに5、6、の任意組合の手を経て集、出荷されているので、実出荷数量は恐らく10,000トンを越すかも知れない。これで八束村の大根栽培の実情がお判りになったと思う。

油断ができないライバル、後進県の動向も不気味

標高はそんなに高い山合いではないと云っても、この山向うはもう直ぐ日本海だという湯原温泉の朝はさすがにきびしく、8朝時半出発だというのに、エンジンが冷えきって云うことをきいて呉れない。仕方がないので、車内に入ったまた暖をとり、9時頃になってようやく

現地へ向う。旭川沿いを100mほど逆戻りして左折、裏の急坂の先方に見えるトンネルを抜け、一気に登りつめる。蒜山の3つの頭や、大山の凄く南壁が、あっちに見え、こっちに見えていたが、やがて、思わず「ホー」と声を出したくなるような高原へ出た。心配した雪は、蒜山や大山に多少残っている程度。そしてまた、今日もなんとという良い天気だ!

大根は既に収穫を終ったあとで、圃場には何も見当たらない。時どき牧舎やサイロが見え、乳牛がエサを食べているの見えるだけ。まことに、ここ蒜山高原は、ヴェルレーヌの詩?のように「世はすべて事も無い。ようであった。

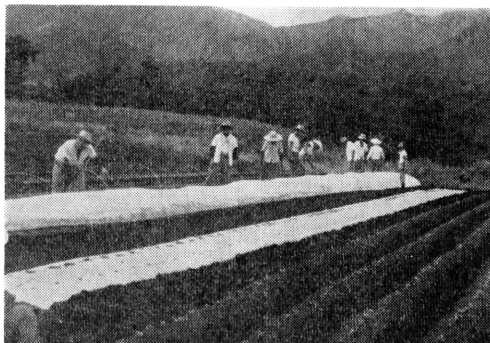
「さあお入り下され、丸山さんにうながされて、八束村農協指導課にお邪魔する。

「わしがここへ来たの?32年のことですわ。終戦当時は海軍の予科練の1人として土浦におりましてなあ、もう少しで死ぬとこじゃったが、どうやら助って、それから新規まき直してここへ来ましたわな。その頃のこの大根は、任意組合による集、出荷が主でしてなあ、農協扱いいうたら、3町歩ぐらいでしたらか?」

「いちばんのネックは輸送の問題ですが、昭和29年頃にはその問題もどうやら解決しておったようで、これからは相当出荷してもええ云うメドがついたらしいですわ。現在では、東は京阪神を越えて中京市場まで、西は福岡市場まで出荷しとります。ええ、もちろん、東京へも41、2年頃サンプル出荷を致しました。冷凍車で今日出荷しますと明後日の朝のセリにかかる。着荷時の状態も良かったので、市場でも好評でしたが、あまり無理はしとうありません。」

といかにも慎重だ。

「品質の点ではどの生産県にも負けんつもりじゃが、なかなか熱心な旧産地や新規に作付けを計画する県もあって、うっかりしとれんのですわ。まあ当のライバルいうたら岐阜県ですかなあ、それに長野県の動向も危険じゃし、近いところでは鳥取県の進出も見逃す訳に行かんの



だ い こ ん の 寒 冷 紗 裁 培

ですわ…。

情報網が発展してただけに、産地間競争は、昔に見られなかった激甚さが加わる。

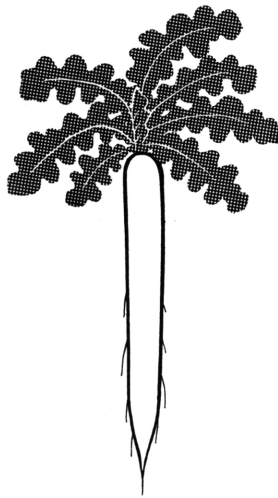
蒜山だいこんと磷硝安加里の馴れそめは？

＊蒜山大根と磷硝安加りのなれ染め？アハ…、それは格別他意はないのでして、実は、この辺のような黒ボク地帯に向く硝酸系の肥料が欲しいと思つておりましたがなあ、ちょうど、いまチッソ旭の本社におられる畑中さんが、(ええその頃は大阪におられましたがお見えになりましてなあ、いろいろと細かいお話がありましてなあ、そういうことならこの肥料を使おうかということになったんですわ。)

＊この栽培型としては①透明ポルマルチ=トンネル栽培(4月20日～5月15日播種)②初夏穫栽培(5月16日～5月25日播種)③夏穫栽培(5月26日～7月25日)④初秋穫栽培(7月26日～8月5日播種)⑤寒冷紗栽培(7月10日～8月5日播種)で、品種は①と②は長交春みの、③は長交夏みの1号または2号、④は長交夏みの1号、⑤は長交夏みの1号または2号を使います。種子は、なんだかんだ云うてきよりますが、ずうっとタキイ種苗にきめております。市場での信用を傷つけとうないのでね。

生産を指導する立場として、これは当然のことであろう。

これらの作型にともなうって、当然施肥設計もちがいが、



完熟した蒜ぜんだいこん

(1) 春まき

肥料名	総量元肥		成分量		
	(kg)	(kg)	N.	P.	K
珪酸苦土石灰	150				
F. T. E	4				
磷硝安加里1号	100	15.0	15.0	12.0	
BM熔燐	10		2.0		
塩化加里	5				3.0
計		15.0	17.0	15.0	

(2) 梅雨まき

肥料名	総量元肥		成分量		
	(kg)	(kg)	N.	P.	K
珪酸苦土石灰	150				
硫加燐安特19号	80	9.6	12.0	8.8	

磷硝安加里1号	30	4.5	4.5	3.6
塩化加里	5			3.0
計		14.1	16.5	15.4

(3) 盛夏まき

肥料名	元肥		追肥			成分量		
	(kg)	(kg)	N.	P.	K	(kg)	(kg)	(kg)
珪酸苦土石灰	150							
磷硝安加里604号	100		16.0	10.0	14.0			
BM熔燐	50				10.0			
尿素入りNK化成		20kg	2.8					
計			18.8	20.0	17.6			

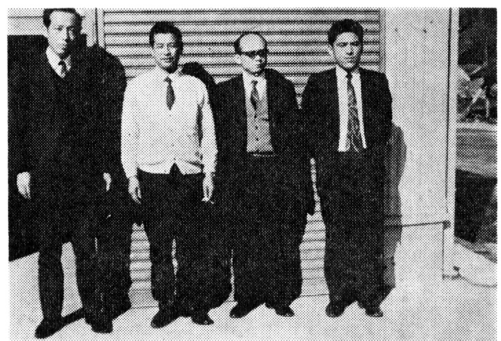
として指導しているが、実際にはどうも窒素過剰の傾向が見えるそう。

＊この頃では堆肥の投下不足からか、モミ殻をそのまま畑に入れる農家が増えております。ハッキリした結果は判りませんが、農家はええ云うとりますなあ。たしかに土壌は膨軟にはなるうが、1,2年は腐敗せんので、どんなものでしょうか。とに角、このあたりのように黒ボク地帯の大根栽培には1作当り N15kg, P17~20kg, K10~17kgぐらいがええとこじゃと思つてますが、岐阜県ではNで20kgやっとなります。

大根の生産合理化……どうもあの足が邪魔で…。

指導課内での話は一応打ちきって、再び自動車で近くの集、選果場へ。16頁写真は選果機の一部を撮つたものだが、この機械について丸山さんは

＊大根の栽培の合理化或は機械化の可能性はどうかとなると、なかなかむずかしいですわなあ。何せ、1区画が小さいのでねえ…。この機械にしてからが、ミカンやリンゴ、或はタマネギなどちごうて、にゅうって足を出しとりますでしょう。丸い小さいものなら選果機も楽に設計できましようが、葉も裁断せにゃならん、長い足を持つとるので、ご覧のように吊環に1本1本かけてやらにゃならんのでね、これの設計には随分と考えさせられたもんですわ。それでも、わしのとこと、もう1カ所、とも角、大根の大型選果機を備えたところは、日本で二



集・選果場前で(左から後藤・丸山・吉野・平田さん)

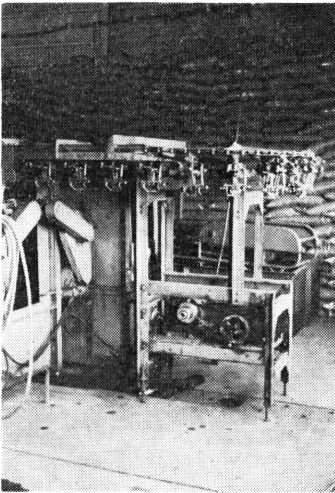
軒しかありませんとのこと。。

足踏み式の洗濯機や、手で何本か揃えて適当な長サに葉を截っていたのでは、とても間に合わないというのだが、さりとて作業はできる限り合理化しなければならぬが、肝甚の大根の『白い足』が、ともすると合理化のネックになるというのは、いささか皮肉めいている。

隣の川上村農協へ立寄ったあと、更に自動車を走らせて『蒜山高原レストハウス』に到着する。太陽はすでに正午に近く。空の蒼さに映える大山と蒜山の姿は一段と美しい。

川上村の指導課長佐山さんにもおいで願って、昼食をとりながら、いろいろ話を伺ったが、われわれが質問した米の生産調整について丸山さんは、次のように語った。

『米の生産調整…、米の需給という点から云うたら、確かに全般としては過剰ですわなあ。けど、八東村の立場ということになると、これはまた別なことになるのですわ。実は今夏(45年)こんなことがありました。米生産原である本県の南部、とくに岡山市を中心に配給米が不足して大騒ぎになったことがありました。その原因は、備前米はその品質の点から非常に市場人気



日本に2台しかないというだいのこの大型選果機

がええのです。その結果、県南部の米は殆んど自主流通米に流れてしまうという訳ですなあ。。

『もっとも、来年になって生産調整に関する線引き作業の結果、どんな地図が作成されるか、対策はそれから

ということになりましようが、わしらとしては、それほど神経質には考えておらんのですよ。さっきも申し上げたように県南における米事情もあるので、美作の米が応援せにゃあかんようになると思います。それに、八東村の産米の単位当り取量は県第2位、県下でも有力な平たん部という訳です。(43年10 a 500kg, 44年490kg, 45年510kg)岡山県は元来、米では生産県ですよ、これを、まさか輸入県にするようなことはせんと思いますがあ、それにしても、今後は乾田直播方式を考える必要があるかも判りません…。』

米の生産調整を転機として、わが国の農業は大きく揺れ動いているようだが、ときによっては300cmも雪が降ることがあるというこの蒜山高原に、米、大根、或いは酪農さては天与の清水を利用して鱒や鯉の養殖など、経営の多角化、合理化を推進している生産団地がある。大根だけで年間最低150万円から200万円、酪農を兼業している人達はまず400万円は固いらしい。しかし、それも指導する立場にある丸山さんのような人達の骨折りがなければ、なかなか実現はむずかしいというものだ。

食事を終って外へ出る。陽はいよいよ高く、そしてますます暖かい。こののどかな別天地にいと、筆者は東京へ帰るのが、つくづく嫌になった。

年がかわったと思ったら、もう
あ と が き

2月、それもすぐ過ぎてしま
うでしょう。いよいよ、46年度の米の生産調整の都
道府県別割当数量がきまりました。これからの農
政がどのように展開して行くか、大変興味がある
ところです。

皆さんのご活躍をお祈り致します。